

「書かないこと」を書くカフカの三長編断片における詩学的戦

下園, りさ

<https://hdl.handle.net/2324/1543914>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	下 菌 り さ			
論文名	「書かないこと」を書く カフカの三長編断片における詩学的戦略			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	小黒 康正
	副査	九州大学	教授	吉井 亮雄
	副査	九州大学	教授	菊地 惠善
	副査	九州大学	准教授	武田 利勝

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、三つの長編断片を考察の中心にすえながら、カフカの自己省察的な詩学的戦略を明らかにする論攷である。

「私は文学からできている」と断言するフランツ・カフカ（1883-1924）は、「書くこと」と「生きること」の一致をめざしながら、『失踪者』（1912-14）、『訴訟』（1914-15）、『城』（1922）という三つの長編小説を未完という形で書き残した。三長編断片の主人公はそれぞれ、カフカのイニシャルを共通して持つよそ者として未知の社会へ足を踏み入れ、書かない主人公として書く支配組織に対峙する。本論文は、従来の研究で見落とされてきた「書かない主人公」に着目しながら、権威的な「書くこと」に対するカフカの詩学的な戦略が「書かない」ことを書くことにあると見抜く。

本論文の第一章によれば、『失踪者』は集団への受け入れとそこからの追放を繰り返し描きながら、「書くこと」の権威的な支配に翻弄される「書かない主人公」がそうした支配が及ばない「底辺のユートピア」へと次第に追いやられていく過程を示す。第二章が扱う『訴訟』では、「書くこと」は官僚制における典型的な支配手段に他ならない。主人公は権威的な「書くこと」に対抗する弁明書として半生を微に入り細に入り記すことをもくろむが、その際限ない自伝執筆に取りかかることができず、結局のところ、「書かない主人公」と化す。そして第三章が扱う『城』において、「書かない主人公」は歴史保管所として書類に溢れる支配組織と対立する。城への道を探す途上で村の歴史を聞き集める主人公は、書き残されなかったもうひとつの歴史を掘り起こすことで、権威的な「書くこと」に対して揺さぶりをかけるのである。

カフカは、非権力的な「書くこと」を産み出すために、権力的な「書くこと」を書き、同時にそれを打ち消す主人公を書き続けた。本論文は以上を明らかにするため、カフカが書き残した他の作品群、イディッシュ語に関する講演、マイナー文学のテーゼ、さらには日記や手紙も検討し、併せて関連する膨大な二次文献も批判的に検証する。以上の学術的な手続きを経て、本論文はカフカの「書くこと」が「書くこと」の内部から「書くこと」を否定する詩学的戦略であることを明らかにした。

以上のとおり、本論文はカフカ文学を新たに問いなおす画期的な労作に他ならない。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力をもつことをここに認める。